町史のひとこま（第二十八回）

わが町の――享保大ききん

ききん

日本史の中でききん（飢饉）に関する記事は枚挙にいとまがないほど多く出てきます。「飢」とは「五穀（穀物）が実らないこと」を言い、「饉」とは「野菜が不足すること」をさす言葉です。「ききん」というのは穀物や野菜――総じて食物が極度に不足した状態を言ったのです。

わが国が農業立国であったかぎり、定期的に来襲する台風などによる風水害や冷害・虫害などによる被害を避けようがなく、ことに農業技術がおくれていた江戸時代までは、人々は天災としてあきらめざるを得ませんでした。

しかも、その結果として、たちまち「ききん」という現象が起き、多くの悲劇がくり返されることになったのです。

天明の大ききん

最も悲惨な実例が「天明の大ききん」と言われるものです。

これは東北地方を襲ったききんですが、天明二年（一七八二）から同七年まで気象の異常が相次ぎ、ことに同三年に浅間山が大噴火をおこしたことが遠因となってその年の夏は綿入れがいるほどの寒い夏となりました。

東日本では、この冷夏の影響をまともに受けて、史上空前の大凶作でした。ある史料では九六％もの収穫減だったと言われます。

農民は食べるものがなく、日ごろ口にしない草の根まで食べざるを得ませんでした。食べ物を求めて村を出て行き、流民となりついには行き倒れる人々もありました。村に残った場合も飢え死にする人が多く、飢えて弱った体に疫病の流行という追い打ちで、次々になくなる人が相次いだのです。死人が出てもそれを葬る気力も体力も、残った人は持ち合わせていなかったと言われます。

天明四年には東北地方全体でききんによる死者は一〇万人に上ったとも推定されています。

享保の大ききん

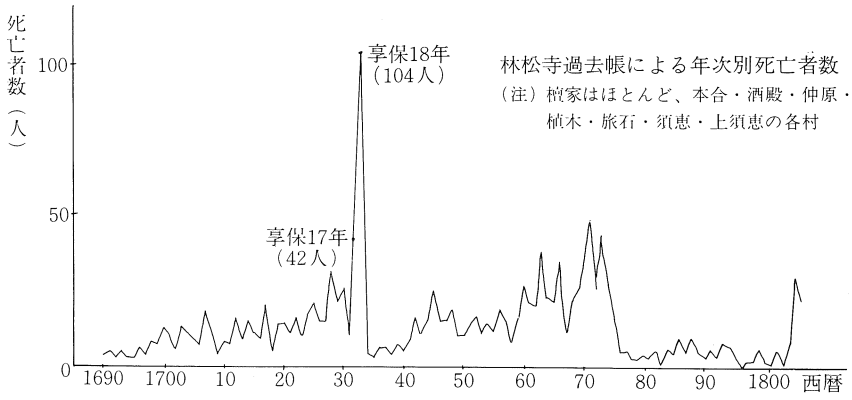
享保の大ききんは、西日本を中心に被害が出たもので、天明の大ききんより約五〇年前のできごとです。

これは気象・天候の異変によるものではなく、享保十七年（一七三二）のウンカの大発生によって引き起こされたききんでした。ウンカは中国大陸から西風に乗ってやってくるらしく、六月中旬に九州にウンカが発生して稲の茎をくい枯らしはじめ、病虫害にふさわしい天候だったことから、たちまち関西地方にまでウンカは広がっていきました。博多では、虫が水に浮いて川を流れるありさまに、水の色も変わるほどであったと言います。

その頃、農民には虫害対策の知識がなく、わずかにじゅ文をとなえたり、〝虫追い〟と言って夕方にたいまつをともし、カネ・タイコをならしながら虫を追い払うといったことしかできませんでした。

この虫害対策として出てきたのが田んぼに鯨油をまく方法で鯨油の上にウンカを落とし、窒息させて退治したのです。

享保十七年の大ききんで、福岡藩では当時の人口約三六万人のうち三分の一にあたる一二万人ほどが餓死したと言われています。

グラフは、乙植木区の林松寺過去帳を集計したものですが、享保十七・十八両年の死者数が群をぬいてふえています。これは明らかに大ききんの影響を受けたものです。このききんによる死者をまつった「飢え人地蔵」が博多中洲にあって今もまつられています。

（町誌編集委員会・石瀧）